

らしたもののケベック州だけで44議席を確保した。この選挙を特集した週刊誌 *Maclean's* (June 9, 1997) は、「選挙の結果、カナダはかつて経験したことのない分裂の危機にある」と報じた。今や、第1野党になった改革党が西部の利益を代表して真っ向からケベックに対決する姿勢を示しているからである。そして、五つの政党が共に12以上の議席をもって議院内「公認政党」(official party) になるというのも前例がない。「これは、単に数字の遊びではない。国が分裂しているという政治的現実の反映なのである。」(同上)

もともとカナダは、広大な領土に人々が極めて片寄った仕方でも分散して住んでいる。エスニック集団の違いや経済的利害(資源や発展段階)の差異がこの上に重なるのである。通例、カナダは極めて異質な六つの地域に分けられる。まず、大西洋諸州。四つの州をひとまとめにしてもカナダ人口の9%を占めるにすぎない。漁業が中心で貧しい。次いで、ケベック。これは既に説明したとおり。オンタリオ州は単独で35%の人口を有する英語系の拠点。平原3州は東欧系の住み着いた農業地帯だが、自然資源に恵まれている。それから、11%の人口を抱えるブリティッシュ・コロンビア州。太平洋からアジアに開かれて、近年発展が著しい。最後に、二つの準州。ところが、人口に比例した下院の議席定数でも、オンタリオとケベックを合わせただけで60%になってしまう。それでいて、すべての州は平等であるという建前がある。建前に従えば、資源があり経済的に発展している豊かな地域から、資源のない貧しい地域へ富を移転させなければならない。1980年代に西部諸州でカナダからの分離を主張する多くの団体や政党が形成された。石炭、ガスと石油、それにウランなどの資源に恵まれているマニトバやサスカッチワンを中心に経済が発展するが、その成果が連邦政府の国家エネルギー計画の実施によって収奪されるという疎外感が大きくなったからである。その上、連邦レベルでの無力感も手伝って、かれらは中央政府の2言語主義、メートル法、移民政策などにも反発した。

#### 4) 第1民族

あまりカナダのニュースを伝えない日本の新聞

が先日次のような記事を載せた。

「1999年4月1日カナダ北極圏のイヌイット(エスキモー)が自治政府ヌナブット(われらが大地)を発足させる。総面積約212万キロ、日本の5.6倍の広さで、北極海に浮かぶ島々を含め北極点にいたる。完全な自治権を持つ新政府下の人口は、22,000人。80%がイヌイットだから、実質的には史上初の<エスキモー国家>の誕生だ。——イヌイットは、先住の土地には権利があると、カナダ政府と交渉、93年、生活圏の82%を国有地とし、先住権を放棄する代わりに、残りをイヌイットの共有地とすることで合意した。」(読売新聞 1997年4月3日夕刊)

周知のとおり、カナダでも合衆国でも原住民はヨーロッパの征服者によって抑圧される運命にあったが、毛皮の交易を主たる目的で入り込んだフランスの植民者(数も少なく、また女性を伴っていなかった)は、原住民と比較的平和裡に共存し多くの混血児(メティス)を生んだ。しかし、英領植民地、そしてカナダ国家としての発展に伴い、インディアンから土地を取り上げ、かれらを一定地域(reserves)に囲い込むことを目的に、協定を結び始める。19世紀後半、たとえばマニトバでは11の協定が成立して、その結果1872年に西部カナダでの第1番目の州(マニトバ)が成立した。原住民はリザーブを残してほとんどの土地をヨーロッパ人に与え、その代わりに一人あたり3ドルの年金と若干の贈り物を手にしたという。(Hagedorn, R. 1986: 282. 協定インディアンの誕生)

カナダの原住民は、イヌイット、メティス、ディナー、クリー、そしてイヌウである。しかし、旧憲法(英領北アメリカ法)では、原住民に関して、カナダ議会がインディアンとそのリザーブについて排他的な権限を有すること、そして裁判所の判断で<インディアン>にイヌイットを含むということ、これだけが書かれているだけであった。これに対して、1982年憲法では、「権利と自由の憲章」のなかで原住民(これにはイヌイット、インディアン、それにメティスが含まれると定義されている)の既存の諸権利を確認しているが(第35条)、この憲法の改正に絡んで提案されたシャーロットタウン合意(1992年)では、First